「比較民俗研究」18. 2002／11

東巴教「祭署」儀礼における生殖崇拝

習煜華※

納西族の東巴教は東巴経・東巴・儀礼の三つの部分から構成されている。およそ千種に上った東巴経は象形文字で書かれており，遠古の神話・物語・宗教祭文などが記されている。祭司「東巴」が納西族の村で活躍し，弟子入りあるいは家伝の方式で伝承していく。儀礼はその崇められる対象により，祭天神・祭畜神・祭署神などの三十種類以上に分けられるが，その規模も一様ではない。

東巴教の中では，超自然的な精霊は山川・河流・樹木・岩石・田畑などに宿っている。これらのいかなる所，いかなる時を問わず，存在している精霊は納西族の人々によって「署」と呼ばれ，崇められている。納西族の神話では，署と人類は腹違いの兄弟である。双方の約束によれば，人類が放牧・耕作する範囲は自分の居住領域のみで，なお植樹しなければ伐木できず，橋を架けなければ用水路を掘り，水を引き入れることができないという。しかし，人類が先にその約束を破り，署の居住領域で木を乱伐したり，溝を掘ったりし始めた。故に，署は洪水を起こし，人類に復讐をした。人類が東巴什羅（東巴教の教主）に助けを求め，東巴什羅が神鵬に署の首を銜えさせ，神羅山を3回ぐるぐるまわり，署に大いに傷をつけさせた。その後，東巴什羅の調停によって，双方が契約をし，人類は乳汁と「里朶」（音リド，蛇蛙同体の面偶）で署の傷病を治し，署はお穏やかな暮らしや五穀豊穣や一家の繁盛などを人類にもたらすと約束した。

納西族の村の多くでは，毎年陰暦二月の「竜の日」また「蛇の日」に祭署神の儀礼が行われ，そこに署の二義性を持つことがうかがわれる。署が毎年時間どおりに供えられ，満足されたら，慈善心を起こし，人間に長寿と豊作を与え，男女に生殖力を賜る。逆に，怒られたら，人類に災害をちらし，しきりに復讐をするという。納西族の人々が署の歓心を買うために，毎年陰暦二月，村単位で盛大な祭署儀礼を行い，署に雨風の順調や五穀豊穣や人畜の繁盛などを祈る。また村人は普段勝手に木を伐ったり，野獣を捕ったりしないように心掛け，署に霊魂をとられることを怖がっている。

東巴経において，象形文字で表現された「署」は類型が多様で，形状がそれぞれ異なっている。首に旗が立てられた署や両耳に蛇頭が生じた署などさまざまがある。祭署儀礼のために設けられた祭壇には，別々に署の像が画いてある五つの木牌が挿されている。五つの署はそれぞれ白，緑，黒，黄，雑色で塗りつけられ，東，南，西，北，中の五方の署神に相応するという。

署の像は，その頭が奇形異状にせよ，身が千差万別にせよ，いずれも頭部には必ず蛙の特徴が残っており，後部にも必ず一つの長い蛇尾が垂れている。この蛇尾はしっかりと張られ，署の命

※中国雲南社会科学院・東巴文化研究所副研究員

脈だといってもよいだろう。

最もよく用いられている「署」の文字は東巴象形文字で と表現されている。上部は蛙の頭，中部は人の身，下部は蛇の尾となっている。字面だけ見て推測の解釈とすれば，署とは蛙頭・人身・蛇尾からなるた生命体であるといえよう。方国瑜・和志武両教授によると，「顕著的な特徴」を強調するのは，納西象形文字を構造する方法の一つである。「一見似ている物は，それぞれの具体的な形を持つ。特徴のある部分を強調すれば，大体似ている同類字形も，具体的な区別がわかり，混合されることはない。」[1] つまり，それは顕著的な特徴を以ってその意味を表す方法である。例えば，鶏頭で鶏を表し，鶏冠と口先を強調する。山羊頭で山羊を表し，双角とひげを強調する。虎頭で虎を表し，模様と耳を強調する，など。祭署儀礼の手順と署への供物からみたら，署と蛙，蛇とのつながりは明らかである。祭署儀礼はしばしば「署に薬をささげる」と呼ばれる。祭司が碗に牲畜の乳汁を注ぎ，柏木の葉或いは草木植物の葉でちょっとつけ，署像が画いてある木牌また「里朵」面偶にまく。乳汁と草薬で署の病気を治す意味を示す。

裸麦粉また麦粉で作られた蛙，蛇面偶はもう１つ重要な供物である。二種類に分けられる。ひとつは「里朵」である。高さ約８寸の台のうえに，蛇と蛙が伏せている。蛇蛙同体の「里朵」と蛇頭蛙尾の「署」の字とは外形上の差別があるが，本質が一致しているといえる。もう１つは，長さ約４寸の蛇と蛙をまずそれぞれ作り，また直径３寸の丸い餅（署の食べ物）を作り，三つのものを一つのセットとし，「里朵」とあわせて署にささげる。祭署の時，祭司が東巴経の『署に薬をささげる』を詠唱する。「白犏牛，白牝牛，白山羊，白綿羊の乳汁を薬にして里朵にささげ，生姜，茶葉を薬にして里朵にささげ，夏に花が咲き，冬に花が散る植物を薬にして里朵にささげ，九味葉を里朵にささげる。…」[2] その後，柏枝で乳汁をつけて「里朵」にまく。「里朵」が祭署儀礼に欠かせないものであるが，他の儀礼にはみられない。ここで，祭司は乳汁を「里朵」にまく行動が署に薬をささげる意味を表す。祭祀儀礼からみると，「里朵」は署の象徴であるといえる。

蛙が多くの民族では女性の生殖器とみなされる。それは蛙の口が女性の生殖器と相似することと，その生殖力が非常の旺盛であるという２つの原因が考えられる。これに関して，楊福泉氏が詳細に論述したことがある。その論述によると，東巴経には女性生殖器を特称する「阿包」(アボ)という珍しい語彙がある。(「包」は納西語で蛙の呼称である。) 永寧納西族が女性生殖器を「包夸(ボカ)」と呼ぶ。東巴経では，納西族の陰陽五行が一匹の「黄金大蛙」から由来すると記している。麗江の納西族がかつて生殖力をいっそうつよくするために，河溝のオタマジャクシを掬って飲むの習俗かあったという。蛙は納西族の生殖崇拝文化において，一種の神秘的な象徴物といえる[3]。

東巴経だけ見ると，蛇が男性生殖器を象徴するという意味は明確ではなく，蛇を男性生殖器と結びつけることが困難であるが，東巴教の二元化宇宙観からみれば，この象徴的意味が明らかになってくる。

東巴教では，万事万物の形成は陰陽が交合し，変化した結果であるという。その交合の過程は「奔包本（ペンボベン)」という。この語彙の象形文字での書き方はいくつがある。鋤の先の下に

1つの物が加えられ（働きの意味を示し，音は本），蒿枝（奔）・蛙（包）とあわせて「奔包本」の仮借字となる。男女の「奔包本」は男性が上位で，女性が下位の性交する形態で表す。天地の「奔包本」は2つの曲がった鈎が掛け合わせられる形で乾坤の交合を表す。東巴経の中で，宗教人物・動物・鬼，さらに，祭祀供物の来歴・出自などが非常に重視されている。公式的な叙述とは「○○父親が現れ，○○母親が現れ，両者が"奔包本"し，そして○○が生まれた。」である。この叙述からみれば，新しい生命が誕生するために，両性の役割はいずれも欠かせない。東巴教は，生命が男女によって共同に作り出されるという観点を祭文（言語の力）で表しているだけではなく，祭署の祭壇にも，目で見える署の象徴物—蛇蛙同体像で，その観点を伝えている。男女が共同に生命を創造するという観念から推測すると，蛙は女性の象徴であるといえるならば，蛇は男性の象徴であるともいえるだろう。

他の東巴経に記している物語から，蛇が男性生殖器の象徴である結論を証明できる根拠はいくつかがみられる。

『人類移動記』によると，洪水の後，地上にはただ崇忍利恩1人しか残らなかった。彼が天上で配偶を探し，まずきれいな縦眼女を嫁にもらい，2人の間に生まれたのは蛇と蛙で，人間を生むことができなかった。その後，彼が頭のいい横眼女を嫁にもらい，正常に人類を繁殖させることができたのである。ここで，縦眼女とは当時婚姻関係から排除された女性をさし，蛇胎と蛙胎とは，私生児のことをさしている。蛇と蛙とは，それぞれ男子と女子をさしている。

『魯般魯饒』によると，「開毎吉命金」という若い女性が仲間を離れて独居しているから，仲間に男性と性的の関係を有すると疑われ，彼女については「女性の貞操を重んじない不良の女で，小蛇，小蛙が彼女のお腹にいる。」といううわさが流されているという。

上の蛇胎と蛙胎とは婚姻以外の関係にいる男女の間にうまれた生命体で，倫理を反した「怪物」である。ここで，因果関係を逆転させ，いのちが誕生する原因である蛇と蛙（男女の生殖器）をもって，その結果，すなわち社会に認められない私生児のことを表している。この2つの物語から，蛇と蛙とは男女生殖器の象徴であることがうかがわれる。

祭署儀礼の手順は「尼味俄味」といい，署に生殖力をこいねがうことを意味する。「尼」とは男性生殖器をさし，「俄」とは女性生殖器をさす。この説と蛇蛙同体の署の象徴物に対応してみれば，儀礼の目的は蛇に男性の生殖力を，蛙に女性の生殖力をねがうと考えられる。

人類自身の生殖力を超える能力を求める願望を社会的行為とみなされば，署の内包には「天人合一」の観念が現れている。人類が旺盛な生殖力をえるために，みずからの命が陰陽の交合によって生み出されるという経験をもって，万物の成長を解答していく。こうして，納西族の人々が自然に対する理解と人に対する認識を署の形象に融合させ，両性の生殖器を備える署を作り出し，自然界の精霊としてあがめる。署はその尽きることのない生殖力を蛇蛙の像を通じ，人の生殖器に感応させ，その生殖力を促し。「天人合一」の観点から蛇蛙の象徴的な意義を理解すれば，署は自然の精霊である同時に生殖の偶像であることには，不思議ではなかろう。

神話において，蛇はしばしば男性の象徴として登場している。東巴経の『都沙阿吐の物語』に

よると，都沙阿吐が山の奥へ放牧にいったとき，紐沙阿吐が都沙阿吐の妻と私通していた。噂をきいた都沙阿吐が直ちに家に戻ってきたが，紐沙阿吐はその前に1匹の蛇に変身して竹で編んだ籠に隠れていたという。

蛇郎に関する物語は多くの民族の間に伝わっている。漢文化の中にも，蛇が男性の象徴と見なされる事例はいくらでもある。天地を開闢した伏羲は蛇身の神であり，物質文化を創造した黄帝と人々に文字と耕作を教えた神農は人首蛇尾の身である。神話の中の夸父は両耳にそれぞれ1匹の黄蛇が貫き，また両手にそれそれ黄蛇を握る。

人類文化の発展につれ，蛇が次第に加工され，竜に美化された。聞一多先生は竜が多種の動物の特徴を兼ね備えた仮設の動物であり，蛇を基本として，馬頭・鹿角・犬爪・魚鱗などの要素を融合した動物であると指摘している。竜の形象とは蛇から延伸したものであり，竜に礼拝することは蛇への崇拝から出所したと思われる。

漢民族において，竜が水源を支配し，旱魃と冠水を主宰している神霊であるとみなされる。したがって，人々が次々に水源河辺に竜王廟を建て，竜王に風雨の順調と五穀の豊穣を祈る。一方で，漢文化において竜と蛇がよく雄性の代表と思われる。『易経』には竜が雄性の象徴である。『拾遺記』によると，神母が毒蛇に巻きつけられ，感知して妊娠した，12年を経て疱牲を生んだという。『路史・後記』では『室纘記』を引用して，帝女が華胥の淵で遊んだところ，蛇によって妊娠し，13年を経て伏羲を生んだということを記している。昔話には，漢高祖の誕生について，「太公は妻と竜との交合を見かけた」という[4]。王権が至上である封建社会において，竜の表した権力と人為の血縁関係を結ぶために，その母親と竜と交合する神話を作り出し，人心を惑わし，奪い取った王位の正当化をはかろうとしていた。一方，蛇と竜とが神話や昔話には父権の役割を果たしている。

納西族の署と漢族の竜とは多くの相似したところがあるため，署はしばしば竜と同一視される，同列に論じられ，文化融合の一例であるといわれ，納西族文化における署と漢文化における竜とを対照してみたら，竜が雄性を象徴するという観念から，署のもつ蛇尾は男性の生殖器を象徴する意味をさらに裏付けるといえよう。漢文化の中の竜と納西族が崇めた署と結びつけてみれば，竜に対する崇拝は，蛇が男性生殖器の象徴であるという生殖崇拝から源を発することの痕跡がうかがわれる。

註

1）方国瑜・和志武　1981年『納西象形文字譜』雲南人民出版社

2）東巴経　『送里雑』

3）楊福泉　1991年「東巴経所反映的生殖崇拝文化」『東巴文化論』雲南人民出版社

4）呉格言　1994年『中国古代求子習俗』花山文芸出版社